かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

駅家の町は奈良時代以来の山陽道の宿場町である。
お糸伝説で有名な服部大池から服部川を下ること
1.5km、明るく開けた川岸に驛家分教会が現われる。

立教181年
2月号

大教会長様おはなし

反省し、目標を確かめて親孝心一筋に立ち返ろう

1・20年頭会議において

立教181年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長・布教所長らが参集した。

大教会長様は、先ず、『天理時報』に掲載された、1月4日、本部会議所における真柱様の年頭あいさつを拝読。続いて、この1年を、真柱様の思いに沿って歩むこと、そのうえから、笠岡として「親孝心」ということに思いをおいてつとめることが大切と述べられた。その後、講堂で会食がもたれた。あいさつの要旨は次の通り。

（ゴシック体部分は『天理時報』1月14日号より引用）

▼私たちの通り方について

銘々が反省しよう

例年、大教会の年頭会議では、真柱様の年頭あいさつをテープで拝聴しますが、本年は、天理時報に掲載されたものを拝読してその代りにします。

先ず、表統領先生の方から、新年に当たってのごあいさつがありました。

その中で「をやのご守護に感謝し、おかけくださる親心を思案して、一手一つにたすけ一条の道をひながた通りに通らせていただきたい」「それぞれの立場に頂戴する御用を全うし、いつも成人の努力を心がけさせていただきたい」と決意を述べた。

この決意を受けて、

真柱様は、昨年のご自身の通り方を顧みたうえで、本年は、少しでも、これまでよりも成人していけるように、なんとか通らしていただけたらと思う、と話された。

「昨年のご自身の通り方を顧みた」ということについては、表統領のあいさつの中で、かんろだいの事情もあったし、逆におめでたい事として大亮様のご結婚があった、大変な1年だったと言われたことを受けて、真柱様が、「昨年は、いろいろな事が重なって、大変慌ただしい思いをした。そうしたなかで私は、なんと考えの足らないことか、自分のつとめが足りないことかと、あらためて反省させられる、そのような事を突きつけられたような思いをした」と仰いました。

道の芯であるところの真柱様に反省させてしまうような私たちの通り方があったのかと、あらためて自分自身の通り方を踏まえ、真柱様以上に、私たちがしっかりと反省せねばならないと思いました。

▼お道の目的はどこにあるのか

そして、昨年から始まった後継者講習会が今年も引き続き開催されることにふれ、「こうした講習会があるので、〝後継者育成の旬〟という言葉を聞く。しかし、道の後継者の育成ということは、旬だからしなければならないというようなものではないと思う」と指摘。

昨年は、140年祭に向けての歩み出しの年として、「道の**後継者育成の旬**」ということで1年歩みましたが、「旬だから、育成する、実動する」というのではなく、「育成」というものは、「旬に関わらず、常に、そういうことを心において歩むこと、日々の道の通り方を進めることが大切だ」と、あらためて、教えていただいたように思います。

教会の活動や、また各会の活動は、後継者の育成の活動と言うことができるとして、「教会の活動にしても、それぞれの会の活動にしても、その本来の意味にふさわしく行われているならば、いま私たちが大変だと思っているような状態にならなかったのではないか」と述べられた。

これは、「教会事情」なども含めてのことだと思いますが、

さらに、「年齢に応じた会の活動があり、また道を伝え、しっかり広めるという誓いのもとに生まれた教会があって、

私たちは、「教会」の在り方についても、**「道を伝え、しっかり広めるという誓いのもとに生まれた教会」**だということを、しっかり心においていかなければなりません。

ただ単に、「よふぼく・信者・未信の人をおぢばに連れ帰る、また、団参する」ことが目的ではなく、それらを通して、**「道を伝え、しっかり広めるということ」**が大切だということです。

こういう状態になっているという

ことは、それぞれ一生懸命に動いているけれども、やはりそこに、何かつながらないようなところがあるのではないか。ともすれば、目前の事ばかりに力が入って、その先にある本来の目標を見失って、目前の結果に一喜一憂しているようなことを繰り返して、今日に来てしまったのではないか」と、諸活動に言及された。

別席・ひのきしん団参などをして、「何名、帰らせてもらえて良かった」と、「結果」だけに留まってしまって、その先にある「目標」を達成するところにまで、私たちの成人や日々の通り方が至っていなかったことを、あらためて思案しました。

そのうえで「私たちには私たちの目標があって、それに向かって、現状をしっかり踏まえたうえで、お互い一手一つになって、あらためて目標をしっかり確かめて、本年の活動を進めていっていただきたい」と述べて、話を締めくくられた。

今年1年を、しっかりとした成人の足並みにするためには、「お道の目的はどこにあるのか」を、あらためて、私たち皆が、もう一度、しっかり心においてつとめなければならないでしょう。

▼銘々が「陽気ぐらし」に向かおう

それでは、「**私たちの目標**」、つまり、この道の信仰の目的とは何でしょうか。

天保9年に「世界一れつをたすけたい」といって、この道を始められ、明治20年、25年先の定命を縮めて、「陽気ぐらし」実現を急き込まれました。

では、そもそも、陽気ぐらしの世の中になっていないのは、何故でしょうか。

それは、「私たちが、自分の思い通りに通って親神様のお望み通りに通らないので、神様が、陽気ぐらしではない世界にした」というのではなく、「私たち一人ひとりの心遣いの理が、陽気ぐらしが出来ない姿に現われている」ということです。

ですから、世界一れつがたすかり、陽気ぐらしに向うためには、私たち一人ひとりが、目標をしっかり持って、日々、陽気ぐらしに向うための歩みをもっと進めていかなければなりません。

陽気ぐらし実現のために、25年先の定命を縮めたことを考えてみれば、この信仰の目的は、「ただ単に、自分がご守護いただき、自分の信仰で結構になる」ことではなく、自分の結構、良くなることはおいといてでも、「とにかく、陽気ぐらしに向っての歩みを進める」ということです。

「心定め」というものも大切ですから、その「心定め」の完遂に向けて、「別席に連れ帰った、修養科生が何名出来た」というように歩んでいますが、ただ、「数が出来たからご守護があった」ではなく、それらを通して、どれだけ、真剣にお道を通るようになってくれたのか、正しく、「世界一れつをたすけたい」というおやの思いを、しっかりと心に持ってくれるようになったのか、また、その心でにをいがけ・おたすけして、陽気ぐらしに向って歩みを進めてくれるようになったのかが、大切なことです。

「心定め」の完遂にしても、このことを、しっかり心において、歩みを進めることが大切でしょう。

▼前年以上の真実を積み重ねよう

昨年は、教祖140年祭に向って歩み出しました。この1年の歩みを、より確かなものにするためには、今度は、2年目・3年目の歩みこそが大切です。

140年祭に向ってしっかり歩みを進めるためには、1年・1年の積み重ねが大切だということを、しっかりと心において、昨年以上の真実が積み重ねられるような、今年1年の歩みにしたい。

そのためにも、私たちの信仰の目標はどこにあるのか、求めようとしているものはどこにあるのか、あらためて、しっかりと思案することが大切でしょう。

▼「親孝心一筋」に立ち返ろう

もう1点、この笠岡の道はどうして付いてきたかも、合わせて心に留めておいていただきたい。それは何かと言えば、「親孝心一筋」です。

その思いがあってこそ、神様が働か

れて、この笠岡に道が付いた、今日の道になったと考えてみると、「親孝心」を忘れていたら、皆、それぞれの教会での、よふぼく・信者に対する丹誠やにをいがけ・おたすけも、理の無いものになってしまうのではないでしょうか。

「親孝心」という思いがあるからこそ、にをいがけ・おたすけが、伝え広めにも繋がり、親から子へ孫へしっかりと続いていくということです。

先ず、教会長・布教所長である皆さん方が、「親孝心」ということを、しっかりと心においておかなければ、その思いが伝わっていきません。

真柱様の思いにしっかり沿って、今年1年を歩むと同時に、基本である「親孝心」を忘れずに、今まで以上に、その思いを持って、しっかりとつとめ切ることが大切だと申したい。

もちろん、それぞれ、十分につとめていますが、「信仰の基本に立ち返って進めていくこと」が、「歩み出しにとっては、一番、大切なこと」だと心においていただいて、今年1年、しっかりと、親神様・教祖にお働きいただけるご恩報じの歩みにさせていただきましょう。

《以上要旨》

春季大祭講話

目標を見失うことなく、銘銘が、伝え広めよう

大教会長様

立教181年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら多数の参拝のもと執り行われた。

大教会長様は神殿講話で、真柱様の年頭あいさつを引用され、「私たちの目標」に向かう足取りについてお話しくだされた。要旨は次の通り。

▼「春の大祭の意義」に目的を問う

真柱様は、年頭あいさつで、**「私たちには私たちの目標があって、それに向かって、現状をしっかり踏まえたうえで、お互い一手一つになって、あらためて目標をしっかり確かめて、本年の活動を進めていっていただきたい」**と述べられました。

今日は、大祭に当たり、**「私たちの目標」**というものについて、お話しを進めたい。

「私たちの目標」を温ねるに当たって、一番、大事なことは、今日、この日の意味です。

春の大祭の意義は、明治20年、教祖が25年先の定命を縮めて、私たちの成人を急き込んで御身をお隠しになったことに突き当りますが、つまり、「教祖が25年先の定命を縮めてまで、何を私たちに急き込まれたのか」、「私たちの成人とは、一体、何か」、そこに、「私たちの目標」を温ねるうえでのヒントがあると思います。

▼「私たちの目標」とは

25年先の定命を縮めて急き込まれたのは、一体、何かを思案すると、

始めた理と治まりた理と、理は一つ

（明29・2・29）

と仰せられるように、天保9年10月26日の立教の元一日に、大切な事柄があります。

立教の元一日、「世界一れつをたすけたい」というをやの思いから、この道を始められました。

以来、教祖を月日のやしろにお定めになり、教祖のお口や筆を通して、をやの思いや私たちの真実を教えられるとともに、をやである教祖御自らがひながたを通られて、私たちが求めるべき陽気ぐらしの世界に立て替わっていく道筋を示されました。

50年のひながたを示された集大成として、御身お隠しにつながってきますから、御身お隠しの目的は、「世界一れつをたすけたい」という一言に尽きます。

教祖は、口や筆を通して、「私たちが、この世に生まれ、生きている目的が、陽気ぐらしだ」と教えられました。

ところが、身上や事情に苦しむだけでなく、いろんな争いもあって、お互いきょうだい同士が苦しめ合い、なかなか、陽気ぐらしができない。

その姿を見たときに、「これでは可哀想だ。やはり、陽気ぐらしさせてやりたい。」ということで、教祖のご身上を通して、「陽気ぐらしこそが、私たちが求めるべき真実」だと教え明かされました。

つまり、「私たちの目標」は「陽気ぐらし」です。

▼親が何もかもしてやると子は成人しない

「陽気ぐらし」さすために、この世

の表にお現われになり、ひながたを通られた。そして、50年のひながたを通して、陽気ぐらしに向かう道筋を示されました。

しかしながら、をやが直々、陽気ぐらしに向かう道筋を教え示されても、「をやが何もかもしてくれるから、安心」といって、私たちはどうしても、自らが陽気ぐらしに向かっての歩みを、なかなかすることができませんでした。

現代の人間の親子の姿も、正しくそうでしょう。親が何もかもしてやるので、子供は、「親がいたら、自分が何をしなくても、全部、親がしてくれる。悪いことをしても、親が責任を取ってくれる。だから、安心。」といって、なかなか、自ら成人しようとしない。

教祖が、をや直々に、ひながたの道を通って、人だすけの道を歩んでくれればくれるほど、「をやがいて、何もかもしてくれるから、安心。」といって、なかなか、自らがひながたの道を通ろうとしない。

このまま何もしなかったら、果たしてどうなるか。このままではいけないということで、25年縮めてでも、成人させなければならないということで示されたのが、明治20年の出来事でしょう。

20歳の人間なら、25年で45歳――その当時の平均寿命は、現代のように80・90歳ではなくて、もっと低かったでしょうから――人生のピークを過ぎています。ほとんどの人が平均寿命までいってしまうような世の中だと考えれば、25年というのは長い。

後25年も親が居て、何もかも全部、先導してやってしまったら、成人するどころか、それに至る間に、すべてが終わってしまう。これではいけないでしょう。

▼子供自らが通るためのひながた

また、をやが直々に、陽気ぐらしに導いてはくれますが、本来、陽気ぐらしていないのは、果たして、一体、誰なのでしょうか。

「かしもの・かりもの、心一つが我がの理」と教えられます。

かしもの・かりものを通して、神様が働いて陽気ぐらしができるようにとご守護くださってはいますが、なかなか、その理が分からなくて、陽気ぐらしていないのは、神様がそうされたわけではなく、自分たちが、心一つの理を曲げてしまっているからです。

人間の親が、一生懸命、子供に好き嫌いせずに食べさそうと思っても、子供は、やはり好き嫌いします。そうなると、当然、病気になったり、いろんな事情が起こってくる原因にもなるでしょう。親としては、「これも食べ、あれも食べ」と、何もかもしてやってはいるけれども、結局、「これ好きだから食べる、これ嫌だから食べない」と選んで食べているのは子供自身です。親は、「子供自身のその通り方によって、子供自身が苦しむ」のが、分かっていて全部与えていても、「自分で選択して、病気や災難を招いてしまっている」のが事実です。

同様に、陽気ぐらしの世の中になっていないのは、私たち一人ひとりの心遣いの理によって、そうなってしまっているわけです。

神様が、世界一れつをたすけたい、陽気ぐらしさしてやりたいといって、いくら頑張って働かれても、私たちが、陽気ぐらしに向かう心にならなければ、陽気ぐらしの世に立て替えることはできません。

私たち一人ひとりが、陽気ぐらしに向かって歩んでこそ、陽気ぐらしの世の中に立て替えることができ、親神様が仰るところの世界一れつたすけが成就することになります。

私たち一人ひとりの力・心遣い・歩み方によって、陽気ぐらしにしっかりと向かうことが、真に陽気ぐらしの世界に立て替わるということではないでしょうか。

50年のひながたは、をや直々に歩まれた道ですが、それを、今度は、私たち一人ひとりが歩むべき道筋として与えられたのが、明治20年の姿ではなかったかと思います。

▼よふぼく一人ひとりが働かねば、存命の教祖は働くことはできない

つまり、「私たちの目標」は、正しく「陽気ぐらし」です。

「陽気ぐらし」の世の中を実現するためには、「誰かがしてくれる」ではなくて、私たち一人ひとりが、「今、何をすべきか」・「どう、ひながたを辿るべきか」をしっかりと思案して、陽気ぐらしに向かって歩むことが大切です。

明治20年、教祖が御身をお隠しなされた後に、先人たちが、「よふぼく一人ひとりが、陽気ぐらしに向かって力

「私たちの目標」について話される大教会長様

強く歩み出すしか、ご存命の教祖にお働きいただく道はない。では、陽気ぐらしに向かって、ひながたの道を自分自身で歩もう。」と、心においたからこそ、燎原に火を放つが如く、にをいがけ・おたすけに奔走されたのだと思います。

『おふでさき』に、

たんくとよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで　十五・60

教祖が存命でおられるということは、「をやが直々働いてやりたいが、姿がないのだから、よふぼく一人ひとりが働いてさえくれたら、さあ、をやが入り込んで働いてやるから、安心してたすけ一条の道を歩んでくれ」ということです。

▼大恩に気付き、報ずる心

教祖のひながた＝陽気ぐらしに向かう道筋とは、一体、どういうことか、簡単に言えば、かしもの・かりもの、つまり日々の喜び・感謝の気持ちです。

その喜びと感謝の気持ちを、日々の中でいかに持つか。「心の欲を取り去れば、自ずと心に明るさが生まれ、親神様のご守護の世界だと分かって、喜ばずにはおれない心境になる。」これが、ひながたの第一です。

物をすべて施し切って、その日に食べ物がないときでさえも、「わしらは結構や。親神様が結構にお与え下されてある。」と、心の欲を捨て去ることの大切さ、そして、そのことによって、自ずと心に明るさが生まれることを教えられました。

そうして、「これは、ご守護の世界だ。ありがたい。」と喜び・感謝を持てば、「少しでもご恩返ししなくてはいけないな。」となるでしょう。

これは、誰しもそうでしょう。どんな人だって、人に世話になれば、恩返しするように――例えば、隣から塩のひとつも借りれば、「ありがとう。また、塩が手に入ったからお返しする。」というように――誰でも、「ありがたいな。結構や。」と思えば、人に対して、また、神様にお礼をする気持ちにはなるでしょう。

人の場合は、たまにでしょうが、親神様からは24時間365日、ご恩を頂いていますから、それが分かれば、「ご恩返ししなくては」という心にもなるでしょう。そうしたときに「教祖にご恩返ししたい」と言うたら、教祖は「人さん、たすけなされや」と仰った。

「何とか、ご恩返ししたい」と思って周りを見たら、出産で苦しんでる人がいた（その当時、出産は生きるか死ぬかの事情）。「何とかたすけてあげたい」といって、をびやたすけから不思議なたすけが次々と上がってきました。――これは、「不思議なたすけ」を求めてそうしたということではなくて、「ご恩報じ」という気持ちからでした。

つまり、「かしもの・かりものということが、本当に、ありがたい」と分かれば、「ご恩返ししたい、ご恩報じしたい」という心になって、周りに気を配り、困っている人がいれば「何とかこの人を助けてあげよう」となる。そういうことから、教祖はをびや許しを始められたわけです。

▼たすけの元立と手立て

人さんたすけたいと思っても、ご恩報じの心がなければ、神様が入り込んでくださいませんから、なかなか、そうはいきません。

しかし、

ようこそつとめについてきた
これがたすけのもとだてや　六下り目4

つとめさえつとめたら、神様が直々働くから、安心しておたすけの道を歩いてくれと教えられています。

何故、おつとめによってたすかるかと言えば、おつとめが、人間創造の理＝ご守護の根幹を現わしたものだからです。

つまり、すべてのご守護の根幹がおつとめに籠めてあるので、おつとめさえつとめれば、神様は如何様にも働いてくださる。

私たちが、ひながたを辿ろうとするとき、人だすけの元になるのが、この「たすけのもとだて」であるおつとめです。

しかし、おつとめだけでは、をびやだすけのように、なかなか、直々におたすけすることができない。だから、直々たすける手立てとしておさづけを私たちにくださるようになった。

おさづけは、お取り次ぎする者の力・知恵、そんなものでたすかるのではありません。私たちの心に神様が入り込まれて、存命の教祖が、直々、働いてくださるので、安心しておたすけに取り掛かることができるのです。

つまり、つとめとさづけを通して人だすけの道を歩むのが、私たち一人ひとりが、陽気ぐらしに向かう道だということです。

▼「私たちの目標」見失わないよう

世界中の人間(神様から見れば世界中のこども)が、欲を忘れて、それぞれの持ち場・立場・徳分を活かしつつ、たすけ合う姿こそが陽気ぐらしの姿だとするなら、一人では陽気ぐらしはできません。

今居る世界中の人間が、親神様のお心が分かって、立場に関係なく、欲を忘れてたすけ合うところに、陽気ぐらしが生まれてくるとするなら、今の私たちが、一生懸命、にをいがけ・おたすけするのは、ただ単に「たすけること」が目的になってはいけません。

各教会ごとに、年頭に、人づくりの心定めをしますが、「初席者が1名できた。心定めが完遂できたから、ご守護があった。良かった。」と喜ぶだけでいいのかということです。

目標は「陽気ぐらし」です。別席を運ばすこと、おさづけを拝戴してよふぼくを作ることではありません。それは、飽くまで目的を達するための、成人の途中であって、それが目的ではありません。

結果として修養科を出たとしても、それで「目的を達した」ではありません。修養科に行ったら、その修養科の後、どう成人し、どういう人生を歩むようにするのか、目標に向かって進んで行けるかです。

▼道を伝え、しっかり広める

こういうことが、「教会の活動にしても、それぞれの会の活動にしても、その本来の意味にふさわしく行われているならば、いま私たちが大変だと思っているような状態にならなかったのではないか」・「こういう状態になっているということは、それぞれ一生懸命に動いているけれども、やはりそこに、何かつながらないようなところがあるのではないか。ともすれば、目前の事ばかりに力が入って、その先にある本来の目標を見失って、目前の結果に一喜一憂しているようなことを繰り返して、今日に来てしまったのではないか」という真柱様のおことばになったのではないでしょうか。

皆、一生懸命に御用をつとめているお互いです。何も間違いなことはしていない。ただ、それが、「修養科生ができた、別席者ができた」というような目先の事だけが、何か目標になってしまって、それで満足しているとするなら、本来の目標を失っている姿ではないのか。

本来は、それらを通して、一人ひとりがご恩報じができることです。「欲を忘れて人をたすける人」を育て、をやの思いを世界中の人に、いかに広げていくかが大切なことだと、しっかりと心においていかなければ、せっかくの御用が中途半端な思いになったのでは、をやに申し訳ありません。

たすけて満足するのではなく、をやの心、そして、陽気ぐらしを広めるということです。

陽気ぐらしは一人ではできません。人だすけすることによって、一人、また、一人と陽気ぐらしに向かうことによって、世界中の人間が陽気ぐらしを目標に動けることが、一番、大切なことです。そのための日々のおたすけ活動・御用を、しっかり、つとめなければ、親神様が望まれるような陽気ぐらしの世界にはなりません。

陽気ぐらしではない世界になったのは、一代でなったわけではありません。生まれ更わり出更わりして、何代にも亘って、陽気ぐらしでない世界になったとするなら、陽気ぐらしの世界に立て替えていくのにも、何代にも亘って、生まれ更わり出更わりして進めていかなければならないことかも知れません。

とするなら、私たち一代だけでは、陽気ぐらしの世の中に、立て替えていくことはできませんが、かと言って、諦めるのではなく、その分、1年・1年、確実に、人を替えて、陽気ぐらしに向かう道を伝えていければ、必らず、陽気ぐらしに向かっての歩みができるはずです。――「代を重ねて陽気ぐらしでなくなった」のなら、「代を重ね

て陽気ぐらしに向かう」ことをちゃんと引き継いでいけば、必らず、陽気ぐらしの世界に立て替わってくるはずです。

だから、自分さえ信仰すればいいではなく、とにかく、間違いなく、陽気ぐらしに向かう人になってさえいれば、確実にそれが伝わって、陽気ぐらしの世界に替わってきます。

やり方ではありません。私たち一人ひとりの、「陽気ぐらしに向かうんだ」・「陽気ぐらしをこの世に現わしていくんだ」という固い意志をしっかりと持って、今日、できることを、コツコツと、そして、育てるべき人を育てていくことが大切な角目でしょう。

あらためて、私たちの、求めるところは、一体、どこにあるのかを、しっかり思案し、思い起こして、一代でできなければ二代・三代…掛かってでも向かっていくという思いを持って、つとめたい。

今日、春の大祭、こうして、結構におつとめをつとめました。私たちは、神様から、働いていただくだけの理づくりはできましたので、その理を、種を、いかに、蒔いていくかは、後は、私たち次第ですから、人だすけの種、陽気ぐらしに向かう種を、しっかり蒔きましょう。

《以上要旨》

「有志ひのきしん隊」実施

青年会

青年会笠岡分会（上原明勇委員長）は、1月23日、大教会で有志ひのきしん隊の活動を行い、7人が参加した。

この日は、大教会南側参道に接している斜面から生える木の伐採を行った。参加者は、チェーンソーと鋸で手際良く作業を進め、ひのきしん後には、すっきりとした参道になった。

坂道をおおい隠す、伐採された木々

親里管内学校受験合宿 実施

笠岡詰所にて

教会長子弟育成委員会
学生担当委員会

教会長子弟育成委員会（森本忠善委員長）と、学生担当委員会（山野弘実委員長）は、2月5日から7日にかけて笠岡詰所で親里管内学校受験合宿を行った。これは、昨年より両委員会が共催で、親里管内学校の受験生を世話取りをしているもので、今年は天理高校、教校学園高校の受験生5人、スタッフ、保護者7人が参加した。

天理高校・教校学園高校の受験生

一同は、5日午前中に大教会を出発。おぢば到着後、試験会場の下見、スタッフによる学習指導（教理勉強も含む）、おてふり練習、面接練習などを行った。受験生達は、本番に向けての準備を整えると共に、同じ笠岡に繋がる者同士の絆を深めた。

おてふり練習など、盛り沢山な世話取りが行なわれた

立教百八十一年 春季大祭 祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	中村邦義
	中村剛

講話	大教会長様

役割＼区分	坐り勤	前半	後半
地方	吉岡壽	田中隆之	岡﨑真一
	今川昌彦	山田敏教	上原浩
	横山逸郎	田林久嗣	岡田誠
おつとめをどり	大教会長様	中村邦義	門脇元教
	上原明勇	中島誠治	三島渉
	上原繁道	杉原博之	中村道徳
	大教会奥様	武内正美	門脇加津
	田中ますみ	内海安子	横山小智榮
	門脇郁子	岡﨑豊子	中村初美
笛	山野弘実	上原浩	上原繁次
ちゃんぽん	佐藤道孝	高木昭祥	赤木素志
拍子木	谷内伸自	上原志郎	淺野明教
太鼓	笹尾正治	森本忠善	内海史郎
すりがね	中村剛	上原明勇	佐藤真孝
小鼓	中村義太郎	武内清明	虫明立生
琴	今川佐智子	森本冨美子	高木孝子
三味線	上原順子	谷内美知子	田中つかさ
胡弓	佐藤香苗	笹尾一美	三島照美

三月講話	上原明勇

賛者	三島渉
	山田敏教
指図方	上原明勇

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されていましたので転載いたします。（敬称略）

▼『天理時報』

▽1月14日付「時報俳壇」

・備中㊬　塩飽利子さん

朝詣背山に聞こゆ笹子かな

▽1月28日付「時報歌壇」

・福満㊬　福島悦子さん

「ふるさと」のひとつ覚えの手話の歌
手指まわせば母の顕る

・海松ヶ岡㊬　藤井光子さん

寒空を甘くなれよと呟いて
揉みし干し柿一つずつ減る

・府鮮㊬　奥繁子さん

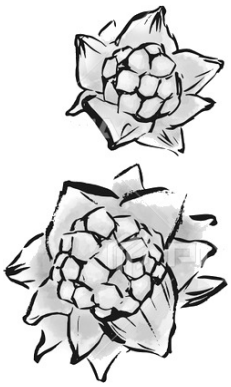
熊本に帰る夫婦を見送りぬ
心優しき婿に感謝し

・芦品㊬　金谷眞佐代さん

ありがたきネックウォーマー
新年も勇む心で時報を手配り

▼表紙写真

（吉岡輝昭かさおか編集部員）



・原・稿・募・集・

内　容　①小随筆　②教会・布教所の独自の活動の紹介　③俳句・和歌・川柳　④教会行事開催後の報告記事 等々

字　数　１０００字前後（８００字～１２００字）題名・所属教会名・氏名を明記して下さい。俳句等は一句からでも結構です。

寄稿先　下記、大教会内『かさおか』編集掛宛ドシドシご寄稿下さい。

郵　便：〒714-0066 岡山県笠岡市用之江３７７

ＦＡＸ：０８６５－６６－１３１４

メール：**tenkasa@yahoo.co.jp**

尚、原稿はお返し致しませんので、予めご了承下さい。

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます
親神様には人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいと思召され私達人間並びにこの世界をお創造（はじめ）になり陽気ぐらしが出来るようにと御守護下されお育て下さいました しかるにその親心を知らず我が身勝手に心を遣い陽気ぐらしが出来ずにいるのを見るや 天保九年教祖を月日の社とお定めになり口や筆を通してこの世の真実をお明かし下さるだけでなく 私達が歩むべき陽気ぐらしへのひながたを親自らお通り下さいました 加えて明治二十年 一日も早く又一人でも多くひながたを通らせてやりたいとの思召から二十五年先の定命を縮めてまで私達の成人をお促し下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます 以来私共はひながたを辿るべくかしものかりものの御恩報じを胸に 朝夕に御礼申し上げつつ人助けの御用の上に励ませて頂いております
その中今月二十六日は 教祖が世界ろくぢに踏み均しに出られた尊い日柄に当たりおぢばでは春の大祭が執り行われますので 当大教会でも理のお許しを戴いて 只今からおつとめ奉仕人一同 たすけたい一条の親心に凭れ陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には同じ思いで日頃たすけ一条に邁進する道の子供達が 今日の日を楽しみに寒さや遠近を問わず寄り集い相共にお歌を唱和して 尚も変わらぬ親心にお縋りする状をご覧下さいまして 親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて立教百八十一年を迎え 昨年の反省を元に心新たに成人の歩みを進めたいと 今月は直轄教会に大祭参拝をさせて頂いて 教祖百四十年祭に向けての成人の歩みをより確かなものにするべく一人一人が陽気ぐらし建設の用木としての自覚を高め親の思召に応えさせて頂けるよう ひながたを見つめ直し それぞれがしっかりと心を定めご恩報じに徹してたすけ一条に邁進させて頂く事を誓い合わせて頂きました 又真摯に道を歩む人材の育成が一過性のものに留まらず 道を広めて陽気ぐらしを実現する為に大切な御用としてより一層力を入れて取り組んでいく覚悟でございます
何卒親神様には年の初めの月に当たり 今年一年の更なる成人をお誓い申し上げる皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして たすけ一条のご用の上にますます不思議自由の御守護を賜り 親神様教祖の親心に触れ一列兄弟の理に目覚めて 一列の子供が欲を忘れて助け合って 陽気ぐらしの世の状が一日も早く実現しますよう御守護お導きの程を 一同と共に慎んでお願い申し上げます

訃報

森川弘志氏
弓ヶ濱分教会長
2月5日出直されました。
享年 72才

江黄招妹姉
元 笠台布教所所長
1月31日出直されました。
享年 91才

昨年の暮れから教会で使用している電気ストーブが次々とストライキを起こし始め、挙げ句の果て最近買ったばかりの物も調子が悪く、保障期間中なのでメーカーに来てもらう事にした。灯油はいつも農協に頼みドラム缶に補給してもらって使用していたが、かれこれ三十年近くそのままの状態で置いてあった。結局、長年の間に鉄が腐食して錆が沈殿していたのだ。それにも気づかずメーカーの人に指摘され初めて気づいた様な始末だった。その後、汚れた灯油をきれいに抜き取りフィルターの掃除をしてやっと元通りに動く様になった。長年の間に積もる心の埃も身体の不調や事情に現れる前に気づき直してゆかなければと、環境に侵された新しい灯油の無言の訴えに今年の心の指針を考えさせられる様な正月だった。（む）